嫌をそねとのみもよめり、

〔類聚名物考 言語十七〕ねたむ　嫉妬

嫉妬の二字をわかちていへば、その義異なり、嫉はよき人をいみてそこなはんとするをいふ、妬は男女の色によりて、ねたむを云へども、二字連ねては、いづれをもいふなり、散對の異なる意有り、文選、離騷賦、屈平　羌内恕己以量人兮、各興心而嫉妬、注、王逸曰、害賢爲嫉、害色爲妬、

〔伊呂波字類抄 畳字〕嫉妬シット

〔下學集 下 態藝〕嫉妬シット チタミチタム

〔書言字考節用集 八 言辭〕悋氣リンキ

〔同 九 言辭〕嫉妬シット 楚辭註、害賢曰嫉、害色曰妬、

〔假名世說〕平秩東作云、自慢も味噌といひ、りん氣も燒餅と下卑て、〇下略

〔皇都午睡 三編 上〕上方で買て來るを江戸にては買て來る、〇中略 悋氣を甚助、妬をそねむ、

〔めのとのさうし〕御ものねたみの事、女房のだい一の大事にて候、さのみおそろしくいひはらだてば、家をうしなひ、身をはたすもの也、またさのみ家のうちに人ありとも、おもはれてあなどらるゝ、もくちおし、〇下略

〔信玄家法 下〕一嫉妬之咎、堅可申付事、云緩堅引賊媒、面塗粉、引婬媒、

〔女大學〕一嫉妬の心、努々發すべからず、男婬亂ならば諫べし、怒怨べからず、妬甚しければ、其氣色言葉も恐敷、冷しくして、却而夫に疎まれ、見限らるゝ物なり、〇下略

〔周南先生爲學初問 下〕一嫉妒は婦人の常なれども、賢女は是を下劣の事にして恥るなり、男子として妒心あるは、女に劣りて下劣の至極なるべし、されど才能ある者を何となくそねみ、善事を聞ては疵瑕を付ていひけす類ひ、皆内に妒心ある故なり、女は陰類に、其心狹小なる故、さもあるべし、男子にして妒心あるは、大きに恥べき事なり、